

シリーズ 尻屋埼灯台（最終回）～まぼろしの灯台伝説②～

八戸海上保安部

【まぼろしの灯台伝説】

前号に引き続き、「幻の燈台仕末記」（燈光：昭和48年（1973年）7月号に掲載）より後半部分をご紹介します。

幻の燈台仕末記

林 誠一（尻屋埼燈台次席所員）

～（中略）～

部落の人の話では、その後も1週間ぐらいの周期で夜半頃に見た人がいたそうです。又こんなこともあった。多分7月頃であったが数名の漁船員が燈台にやってきて「昨夜はひどい濃霧だったが機関に故障を起こし漂流していたら燈台の燈りを見つけたので近くの砂浜に上陸することが出来ました」とお礼をいうのです。事情を説明して燈りをつけていないという何と表現してよいか判らない妙な表情をした。燈台の光と信じていたのが幻の幽霊燈台だったと聞いては無理もないことです。又、当時の青森燈台長から次のような照会もあったのです。船舶運営会から「所属の船舶からの報告によると横浜に行くときは尻屋埼燈台は停燈らしい燈りがついていたが帰航のときには消燈して見えなかったという」現状はどうなっているのかと聞かれたので照会しますと。そこで、私は戦災以来引き続き消燈したままで仮燈も点燈していないとお知らせしたが、この照会にあるように尻屋埼沖を通る多くの船が例の怪火を見ていたことになり、燈火を持って人が燈台に登るとはどうしても考えられない。もし人が登ったものと仮定すれば、なぜたびたび登る必要があるのか？目的は何か？私達でさえ危険で登れない夜半に登るわけは？気狂いか？しかし40キロメートル四方に、そんな変質者はいないと部落の人は言う。そして「殉職した村尾さんの霊が点燈するのだらう」という村人もあり、又故老（※昔の事や故実に通じている老人のこと）の話によると「明治初年に燈台が建設される時、工事に従っていた石屋があったがこの石屋は大の酒好きで酒ばかり飲んでいて手がつけられなかったので皆からうとまれ人柱として燈台のどこかに塗りこまれたという、うわさもあるのでその石屋の霊魂が出たのかも知れない」と。

8月頃になって霧信号舎の上にアセトンガスによる本物の仮燈を点燈し、そのあと大間埼から台長さん達がこられて人数も増えたためか怪火出現の話はパツパツと絶えてしまった。

私が尻屋埼から転出してからも夏になると新聞社や放送局から取材に来て尻屋の怪談ばなしをさせられたものだったが、あれから30年近く経った今となっては遠い昔がたりとなってしまった。しかし原因は現在でも依然として謎のままであるが、私は最近になって当時村人達が言っていたように村尾さんの霊が燈りをつけていたのかも知れないと思うようになったのです。村尾さんは生前こよなく燈台を心から愛し空襲の当日も平和施設である燈台が攻撃されることは絶対無いと信じて防空ごうにも退避しなかったのが戦死されたのですが死してもなお燈火を守られたのに違いありません。私はそう信じたいのです。

6号にわたってお送りしてきました「シリーズ尻屋埼灯台」は今回で最終回となります。日本における灯台の歴史から尻屋埼灯台の歴史や逸話まで、灯台にまつわる様々な事柄をご紹介します。

尻屋埼灯台は今年で136周年を迎えますが、ふるさとの灯台として親しまれ続け、今も船舶交通の安全を守っています。

「シリーズ尻屋埼灯台」を通じて、皆様に尻屋埼灯台のことを知っていただき、これまで以上にふるさとの灯台として親しみを感じていただければ幸いです。



現在の尻屋埼灯台